

平成 27 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	帝塚山大学心理学部 教授 大久保 純一郎
研究テーマ	交通事故被害者に対する心理的支援モデルの構築と支援者養成

<助成研究の要旨>

背景

全国の交通事故は、減少傾向にあるが、事故の発生率、負傷者数は引き続き高い水準であり、その被害者への支援は重要な課題である。また、交通事故死者の背後には、その何倍もの遺族の方がおり、遺族への支援も急務であると言える。対象となる被害者の実数に比較し、支援者の数は決して多いとは言えず、その養成が望まれる。特に、心理的支援を行う臨床心理士の養成は急務である。しかしながら、交通事故被害者、遺族の支援には特殊な要因が多い。重傷事故、死亡事故の多くは、「交通事故」より、むしろ「交通犯罪」と表現すべき場合が多く、犯罪被害者支援の枠組みでの支援が必要である。また、遺族に対しては、グリーフケアの視点も必要となる。これらの多様な視点からの支援が必要であるため、支援者、特に心理的支援者の養成には、特別なプログラムが必要であると考えられた。

本研究の目的 本研究の目的は、1) 犯罪被害者支援担当者の経験を分析し、交通事故被害者支援モデルを作成し、2) 被害者（特に遺族）の心理的支援担当者の養成プログラムを作成、実施し、その効果を測定する事であった。

研究1 被害者支援担当者の経験の分析（1）心理臨床家の経験の分析

方法 犯罪被害者遺族支援経験を持つ臨床心理士を対象として、その経験の語りについて、内容分析を行った。

結果 対象者の語りの分析の結果、次の5点が被害者遺族の支援において重要であることが見いだされた。

- 1) C1 の心理的回復とその過程 通常のカウンセリングのように「問題解決」や「成長」を目的とすることは難しい。C1 の現在を支えることが重要目的となる。また、C1 のレジリエンスを活性化させるという視点が必要であった。
- 2) 技法に関する事 C1 や周りの人々への心理教育の必要性が高い。また、受容と共感についても注意が必要。
- 3) カウンセリング場面以外の生活への介入 裁判、学校、職場、近隣など周りの人々への関与も重要である。
- 4) C1 への配慮 C1 の悲嘆や苦悩には終わりがなく、2次被害からC1 をまもることも必要である。
- 5) Th 自身の事 Th が2次障害を受けることや、逆転移がおこることも多く、その対処が必要である。

考察 交通事故被害者遺族支援は通常の様式では対応出来ない事が多く、特別な知識技能対応が必要である。

研究2 被害者支援担当者の経験の分析（2）様々な支援者の経験の分析

方法 様々な被害者支援担当者を対象として、その経験を語ってもらい、その内容の分析を行った。

結果 対象者の語りの分析の結果、研究1で見いだされた5点に対応する事項が見いだされた。これらの点において、カウンセラーは、他の職種と連携、協働することが必要となる。また、1) 司法的な関わり、2) 賠償金の問題、3) 長期的で多角的な支援の必要性があげられた。

考察 交通事故被害者遺族支援を行う職種間での連携と協働の必要性が改めて明確になった。

研究3 交通事故被害者の心理的支援担当者の養成プログラムの実施と評価

研究1, 2において見いだされた交通事故被害者遺族の支援の特性にもとづいて、交通事故被害者遺族の支援を行うカウンセラーの養成プログラムを作成、実施し、その効果について検討した。

方法 臨床心理学を専攻する大学院生8名を対象とし、3日間からなるプログラムを実施し、その前後で被害者支援に関する技能や態度のアセスメントを行った。

結果 対象者数が少なく、統計的検定など行うことが出来なかったが、プログラムを受けることによって、カウンセリング態度、カウンセリング自己効力感、遺族への配慮など、適切な方向の変化が見られた。

考察 本研究のプログラムは十分なものとは言えないが、心理的支援者の養成の糸口は見いだされた。

総合考察

本研究では、十分な支援モデルを作成できたとは言えないが、交通事故被害者遺族の特徴について確認することが出来た。それらの特徴に基いて作成した養成プログラムは、ある程度効果的であり、今後の支援者の養成に用いることが出来ると考えられた。さらに、プログラムの実践を通し、経験のある支援者同士の論議が進み、相互の連携と協働の必要性が再確認され、実際の協働作業の契機となったが、この点も本研究の成果の1つと言える。